

平安京右京七条一坊十五町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇八―一九

平安京右京七条一坊十五町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京七条一坊十五町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、マンション新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果をここに御報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

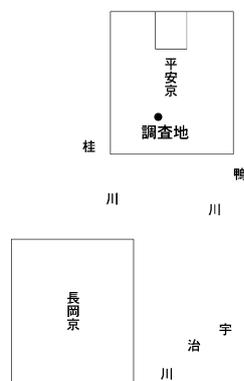
平成 21 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京七条一坊十五町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区西七条西八反田町 129-1
- 3 委 託 者 株式会社 今井建設 代表取締役 今井 隆
- 4 調査期間 2009年1月5日～2009年2月19日
- 5 調査面積 418 m²
- 6 調査担当者 津々池惣一・小檜山一良
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西京極」・「島原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、建物・柵については別に番号を付した。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 津々池惣一・小檜山一良
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経過	1
(2) 位置と環境	2
(3) 周辺の調査	2
2. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構の概要	4
(3) 遺構	4
3. 遺 物	13
(1) 出土遺物の概要	13
(2) 出土遺物	13
4. ま と め	18

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 調査区全景（北西から）
		2 建物 3（北から）
		3 建物 4（西から）
図版 2	遺構	1 流路 1（北から）
		2 水路施設 144（北から）
		3 水利施設 106（東から）
図版 3	遺物	出土土器
図版 4	遺物	出土土器・墨書土器・軒平瓦

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：1,000）	2

図3	調査前全景（南東から）	2
図4	調査風景（南東から）	2
図5	周辺既往調査位置図（1：2,500）	3
図6	南壁断面図（1：50）	5
図7	遺構平面図（1：200）	6
図8	建物2実測図（1：100）	7
図9	建物3実測図（1：100）	8
図10	建物4実測図（1：100）	9
図11	柵6実測図（1：80）	9
図12	杭列7実測図（1：80）	10
図13	柵8実測図（1：80）	10
図14	流路1・溝5実測図（1：100、1：150）	11
図15	水路施設144実測図（1：40）	12
図16	水利施設106実測図（1：20）	12
図17	流路1出土遺物実測図（1：4、25のみ1：2）	14
図18	溝5出土遺物拓影・実測図（1：4、39のみ1：2）	15
図19	土坑143・水利施設106・建物3・柱穴57出土遺物拓影・実測図（1：4、48のみ1：2）	15
図20	石帯・銭貨	16
図21	軒平瓦拓影・実測図（1：4）	16
図22	柱根実測図（1：6）	16
図23	柱根	17
図24	遺構変遷図（1：500）	18

表 目 次

表1	周辺既往調査一覧表	3
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	13
表4	掲載遺物一覧表	19

平安京右京七条一坊十五町跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

今回の調査は、マンション新築工事に伴うものである。調査面積は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課と略す）の指導による 418 m²である。当該地は京都市下京区西七条西八反田町 129-1 に所在し、七条中学校の北側に隣接する。

今回の調査に先立つ文化財保護課の試掘調査の結果、調査区西側で平安時代の宅地に関連する遺構、調査区東側では西櫛笥小路に関連する遺構が確認された。このため、工事に先立ち、発掘調査実施を指導し、(財)京都市埋蔵文化財研究所が担当して調査を実施した。

調査は1月13日から重機掘削を開始して、1月15日に人力による掘削作業に切り替え、遺構検出、精査、写真撮影、図面記録を行った。2月14日には現地公開を行い、2月16日から残務作業に移行し、資材およびリース品を撤去し、19日に終了した。

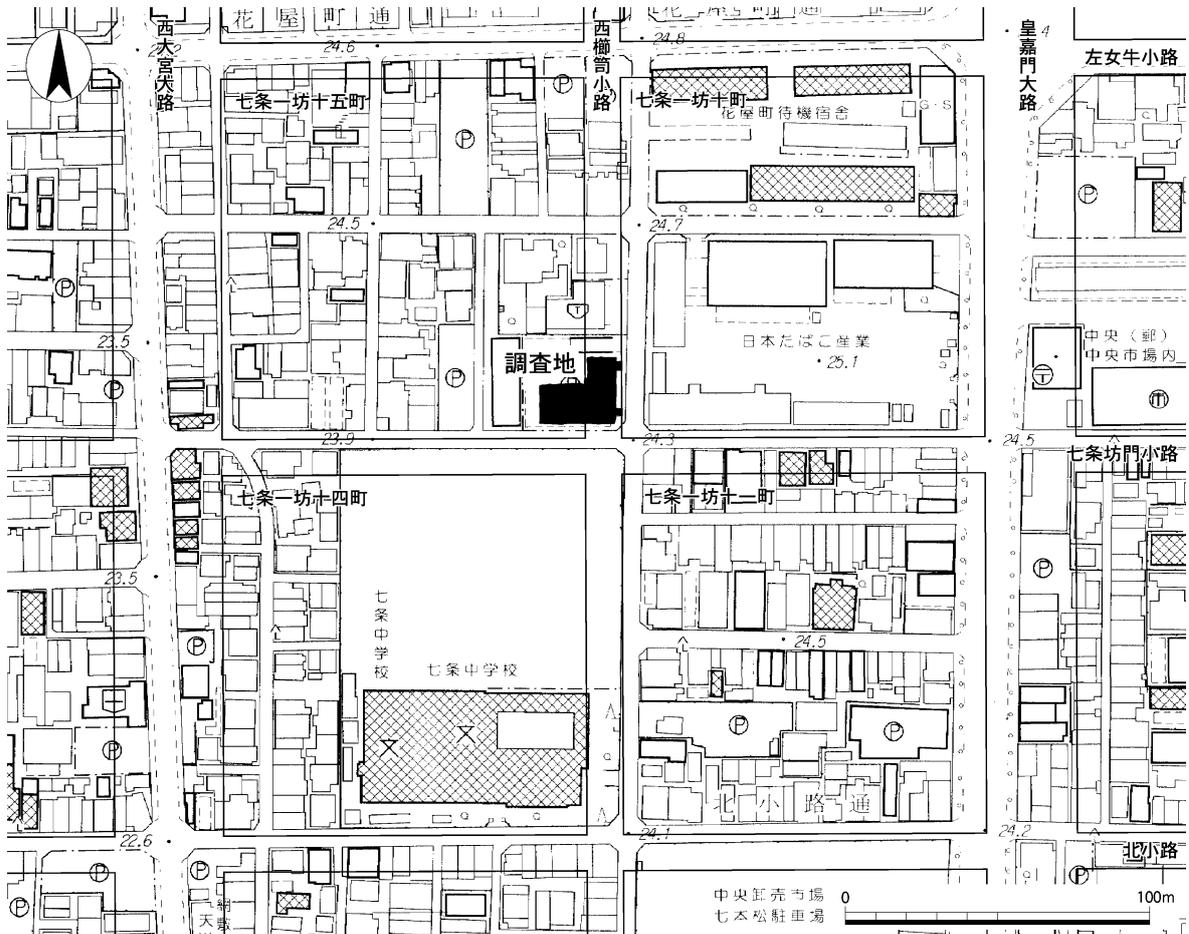


図1 調査位置図 (1:2,500)

(2) 位置と環境

調査地は、京都市市街地の南西部で、七条通七本松交差点の北西 300 m 付近に位置する。当地は、平安京の条坊では右京七条一坊十五町の南東端にあたり、東は西櫛笥小路、南側は七条坊門小路に面する。

十五町内は、『拾芥抄』の「西京図」では空地となっている。南西には西市が位置し、南隣の十四町と西大宮大路を越えた西隣の右京七条二坊二町も西市外町にあたる。東隣の十町は、『拾芥抄』では北隣の九町と共に「故経信卿遺伝領」となっている。平安時代後期（11 世紀代）権中納言源経信の所領があったとされる。

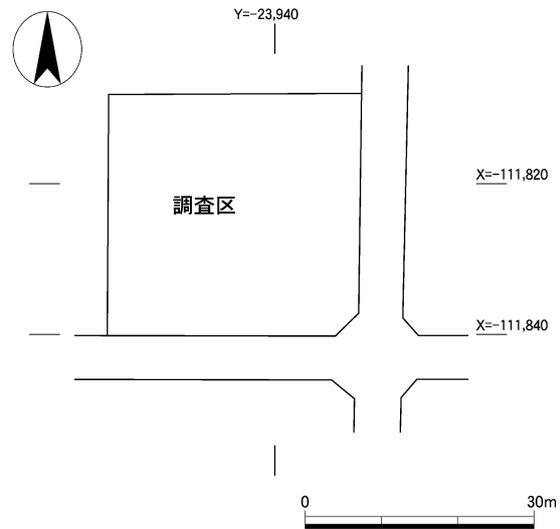


図2 調査区配置図（1：1,000）

(3) 周辺の調査（図5、表1）

近隣の調査では、南隣の十四町中央から北寄りで行った昭和 55 年度の発掘調査（3）で、平安時代前期の建物、井戸、溝などが検出されている。そのほかに弥生時代の方形周溝墓や溝が検出されている。

また、南東部の平成 9 年度の発掘調査（4）では、3 時期にわたる平安時代（9 世紀初頭から 10 世紀にかけて）の建物や井戸、西櫛笥小路西側溝や柵列などが検出されている。

東隣の十町北西部では試掘調査（1）が行われ、自然地形の低湿地が検出されている。

また、その南の同じ十町内では立会調査（2）が行われ、平安時代中期の遺物包含層が検出されている。



図3 調査前全景（南東から）



図4 調査風景（南東から）

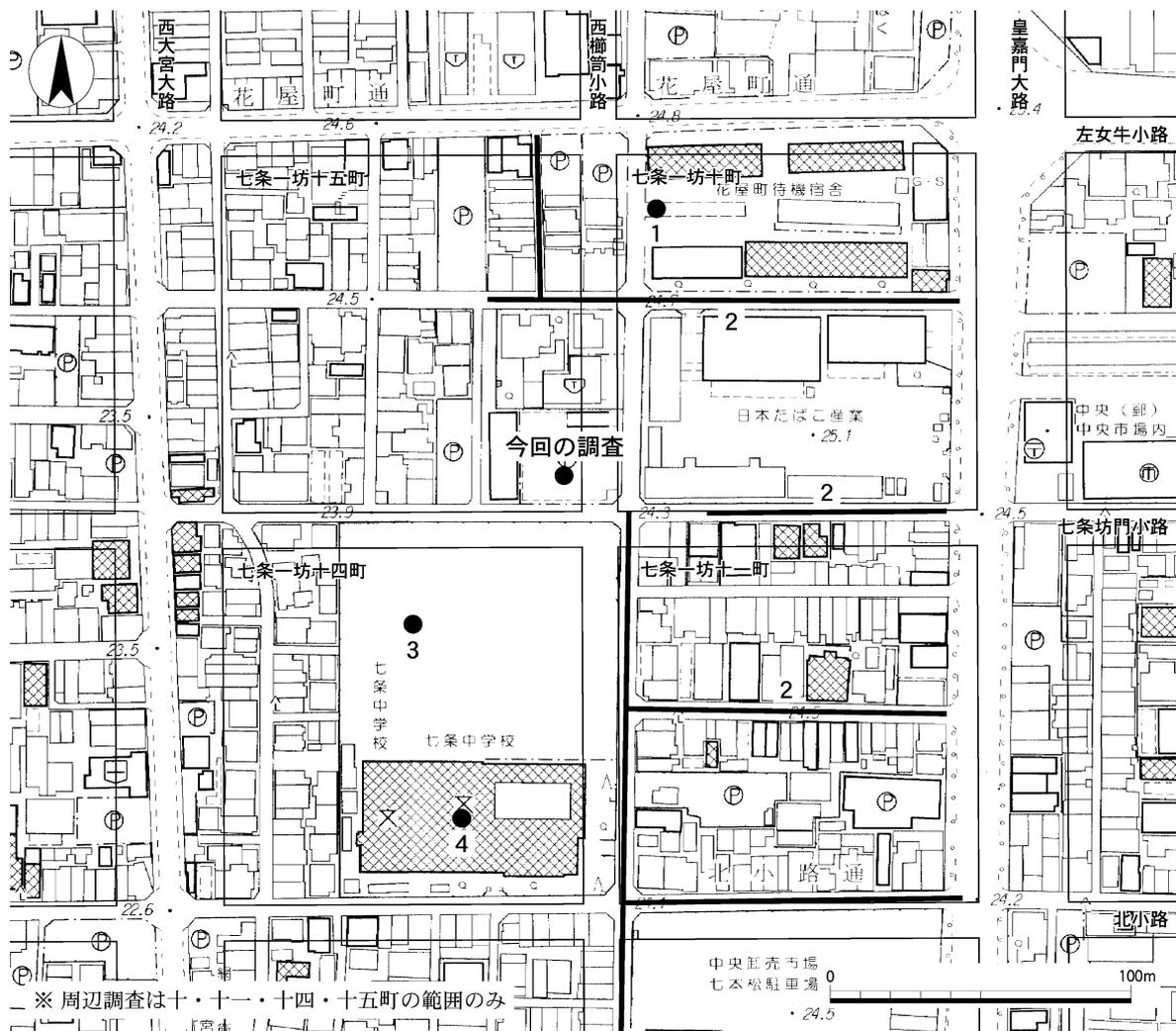


図5 周辺既往調査位置図(1:2,500)

表1 周辺既往調査一覧表

No.	遺跡名	方法	所在地	調査期間	遺構	文献
1	右京七条一坊十町	試掘	下京区西七条東八反田町31	1986.09.26~09.29	自然地形の低湿地。	小森俊寛他「右京七条一坊十町」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年
2	右京七条一坊十・十一・十二・十五町	立会	下京区西七条東八反田町33	1989.02.15	平安時代中期包含層。	吉村正親他「右京七条一坊十~十二町・十五町」『京都市内試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
3	右京七条一坊十四町	発掘	下京区西七条御領町32(七条中学校)	1980.08.26~10.20	弥生時代の方形周溝墓、溝。平安時代の建物、井戸、溝。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
4	右京七条一坊十四町	発掘	下京区西七条御領町32(七条中学校)	1997.09.24~1998.03.09	平安時代の掘立柱建物、井戸、柵列、溝、土坑。西櫛笥小路西側溝。	網 伸也他「右京七条一坊十四町」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
-	右京七条一坊十五町	発掘	下京区西七条西八反田町129-1	2009.01.05~02.19	平安時代の掘立柱建物、柵列。西櫛笥小路推定位置に流路。	本報告

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査地の基本層序は、表土下 1.0 m 前後まではほぼ全域において現代層がある。その下に近代から現代の耕作土層（約 10 cm）と床土（約 1～2 cm）が部分的に残る。以下、褐色粘質土の地山である。攪乱坑が少ないため、平安時代の建物・柱穴群・溝などが良く残存していた。また、平安時代の遺構の下には奈良時代以前の流路が 2 時期にわたり北東から南西に流れていた痕跡を検出した。東部においても流路痕跡があるが、蛇行しており規模などは不明である。

(2) 遺構の概要

遺構は平安時代のものであるが、建物 3 を除いて全て地山面で検出した。検出した遺構総数は 152 基である。

調査地東側では西櫛笥小路の東側溝と、西側溝想定部分および路面部分で流路を検出した。また、調査地西側では建物 3 棟などを検出した。

なお、西櫛笥小路東側溝については調査区の東側を 2 箇所拡張し、規模などの確認に努めた。また、南北棟建物については北側柱筋を確認するため、北側へ約 1 m 拡張した。

(3) 遺構

建物 2（図 8、図版 1-1） 調査区南西側で検出した東西に並ぶ南北棟建物のうち東側の掘立柱建物である。南北 5 間×東西 2 間で、北側棟持ち柱の主穴は削平されている。北庇は不明であるが、南庇は七条坊門小路との関係からないと考えられる。柱間は桁行で 2.1 m、梁間は 2.4 m である。柱穴の掘形は隅丸方形で、一辺 0.6 m 前後である。柱根は 5 本残り、径 0.2～0.3 m に達するものもある。柱穴の深さは 0.2 m までのものが多く、なかには削平を受けて痕跡を見出せないものもある。建物の東側柱はほぼ築地推定線に沿っている。柱穴 94 と 104 を結ぶ付近を北七門・八門の境界線が通る。

建物 3（図 9、図版 1-2） 建物 2 の西側に並ぶ 5 間×2 間の南北棟建物である。柱間は桁行で 2.1 m、梁間は 2.4 m である。柱穴の掘形は隅丸方形で、一辺 0.6 m 前後である。柱根は 3 本残り、径 0.2～0.3 m に達するものもある。柱穴の深さは 0.2 m までのものが多い。柱穴 84 と 78 を結

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
奈良時代以前	旧流路150	
平安時代	建物 2～4、柵 6・8、杭列 7、水路施設144、水利施設106、溝 5、流路 1、土坑143	
江戸時代	溝152	

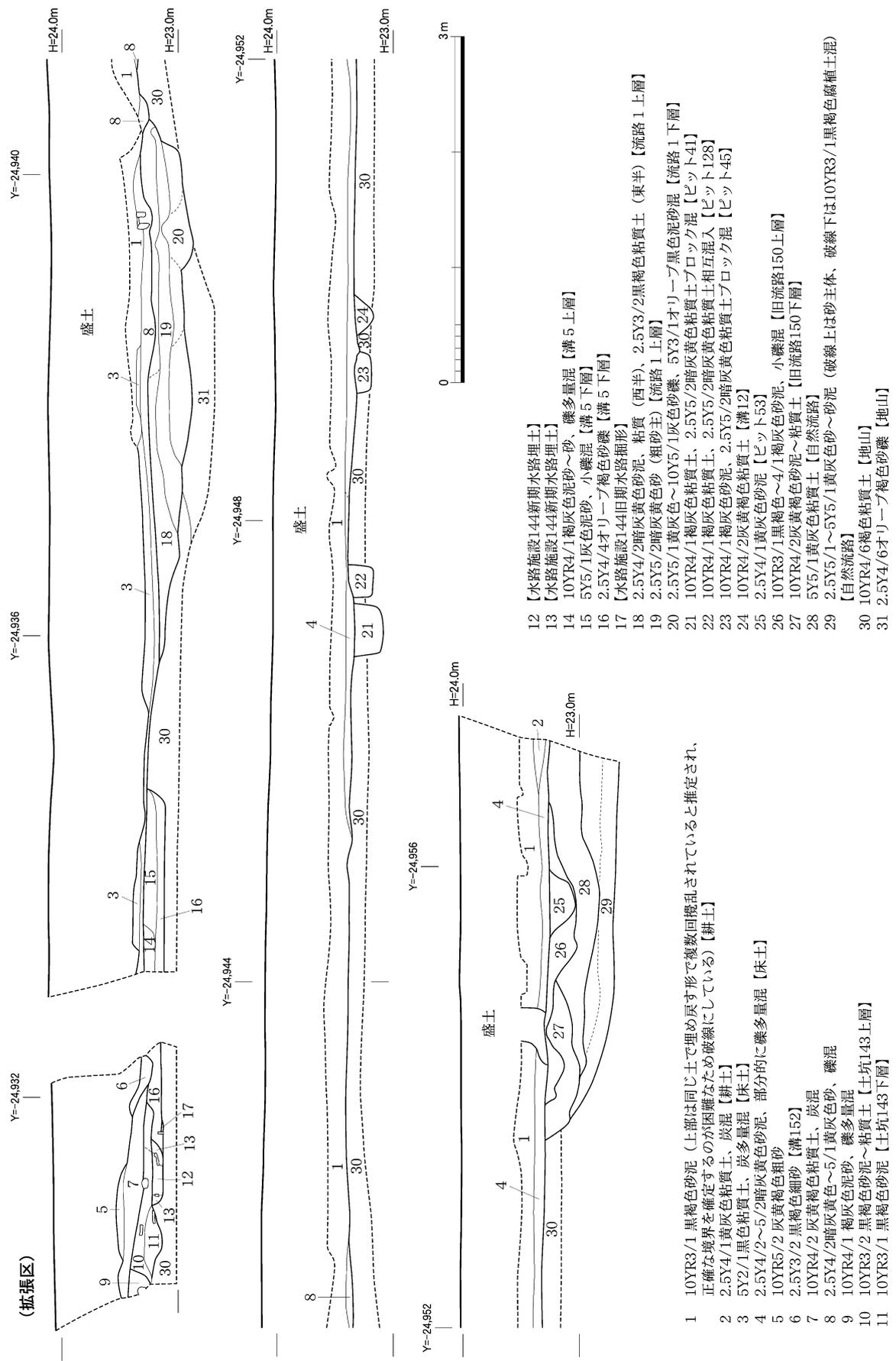


図6 南壁断面図 (1:50)

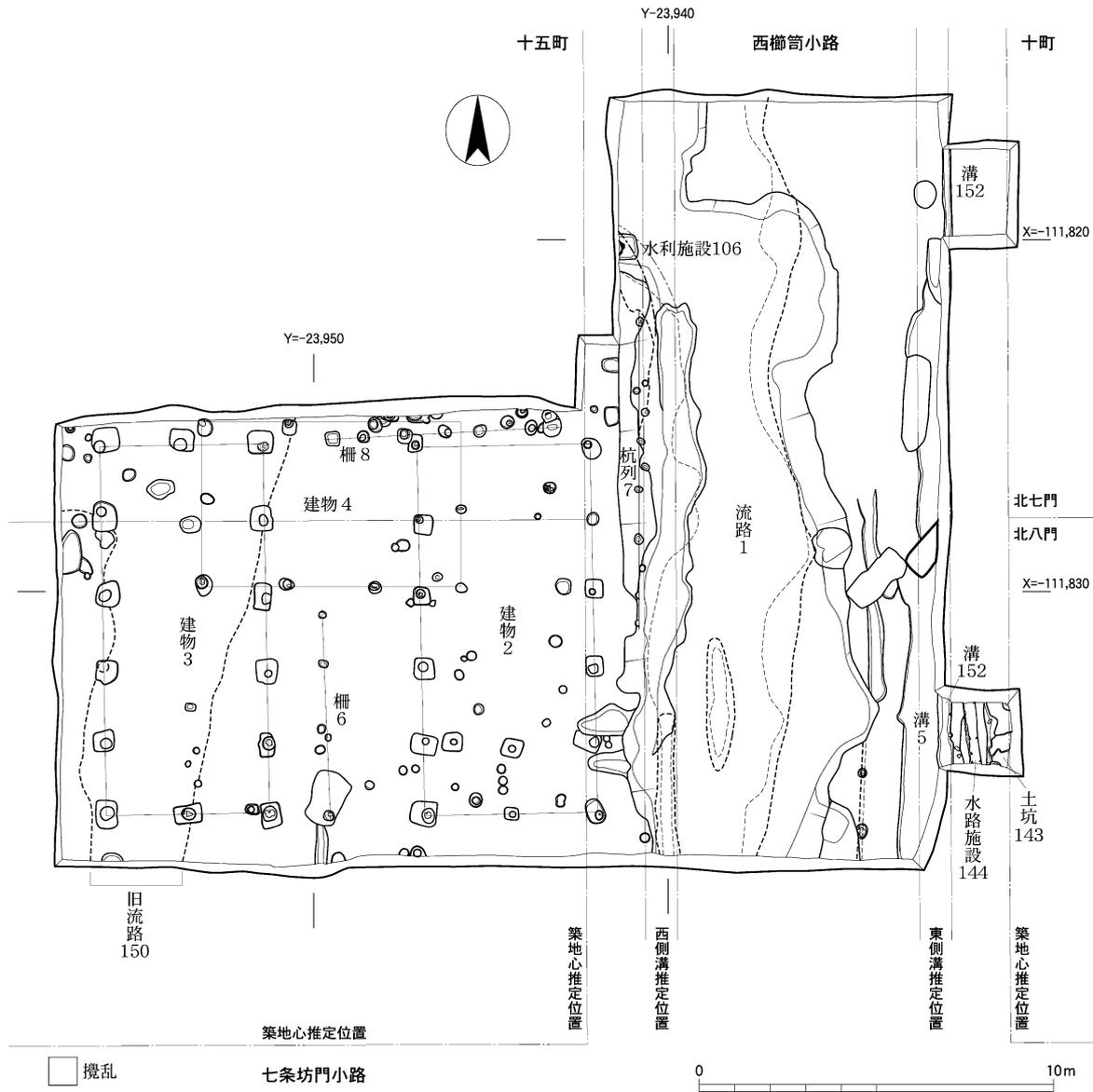


図7 遺構平面図（1：200）

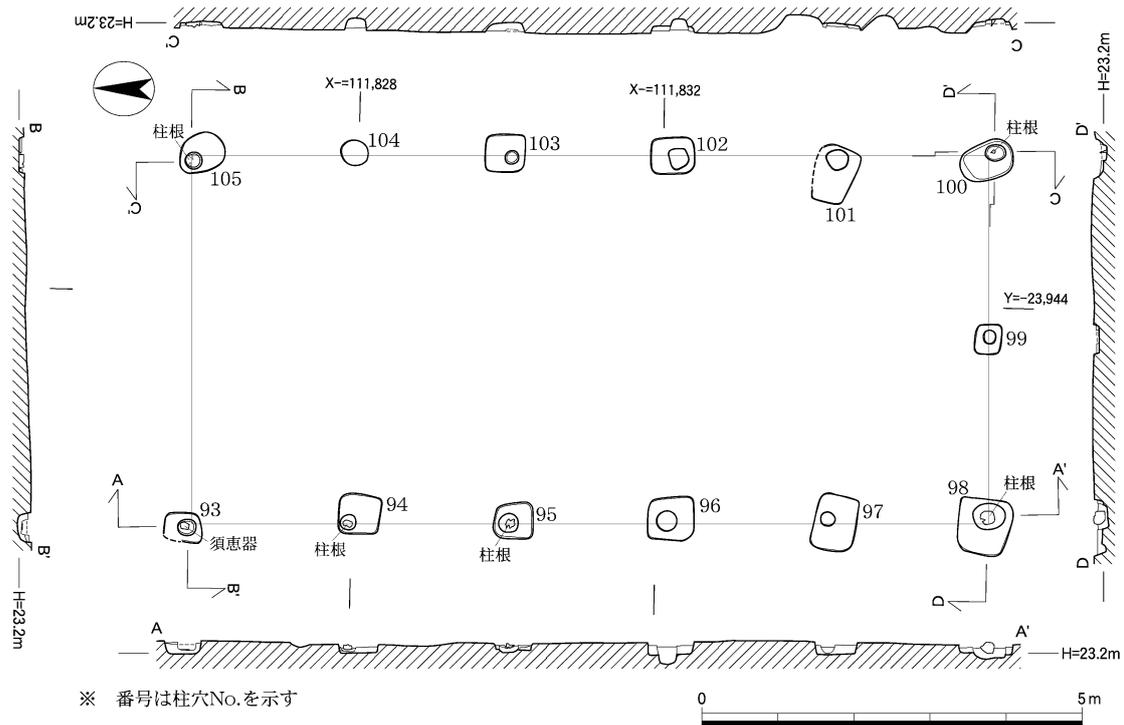
ぶ付近を北七門・八門境界線が通る。

建物4（図10、図版1-3）建物2・3の北側寄りで検出した。3間×2間の東西棟で、柱間は桁行、梁間共に2.4mである。柱穴の掘形は円形で、径0.3～0.4mである。柱痕跡は径0.1m前後で、北側柱筋は建物2・3のそれに近いところに位置している。柱根は4本残る。建物2・3と重複しており柱の形状や規模からそれらより新しいと考えられる。

柵6（図11）建物2と建物3の間に位置する南北方向の柵である。柱穴は径が0.2m前後で、柱間は不揃いである。わずかに西に振れている。両者の遮蔽施設と思われる。

杭列7（図12）西櫛笥小路の西側溝推定位置に沿う形で、南北杭列がある。南北7mを検出した。1.4m間隔が多いが、杭の間隔は不揃いである。各杭の太さは約0.2mである。南隣の平成9年度調査でも同様の例が報告されている。

柵8（図13）建物群の北側柱に沿った形で東西に検出した。柱間は1.0m前後である。柱穴の



※ 番号は柱穴No.を示す

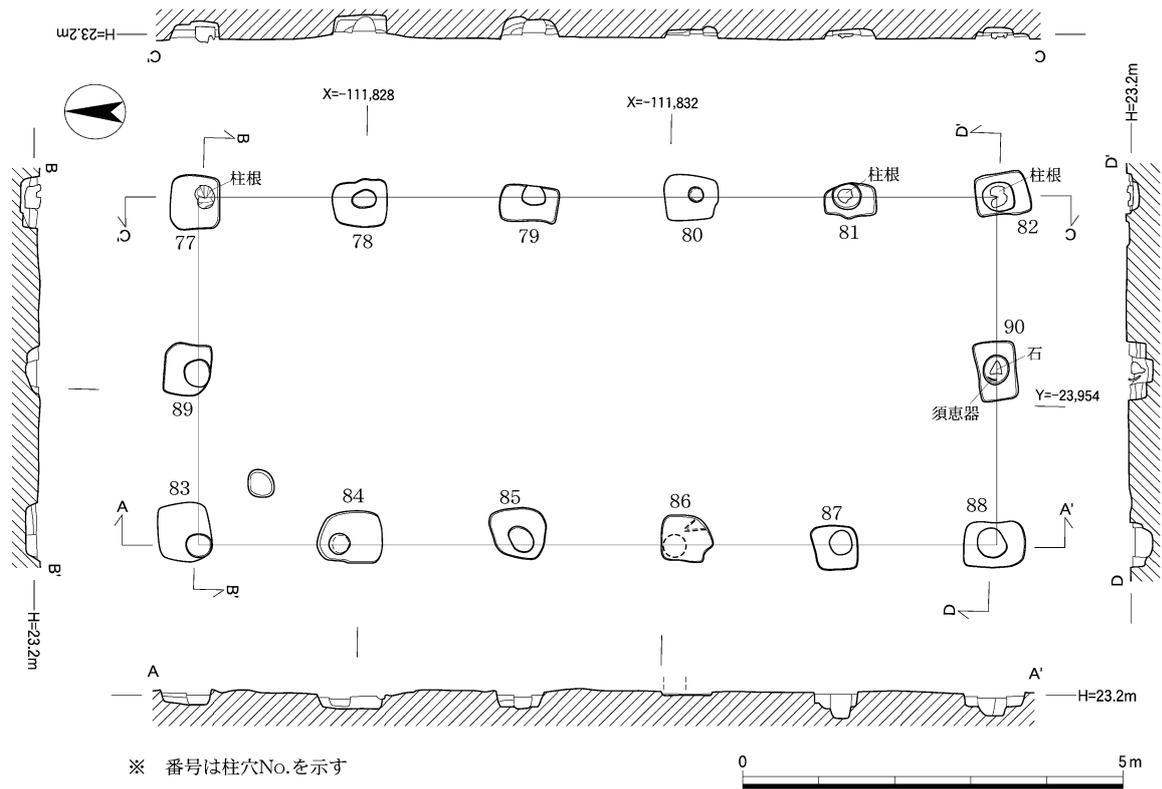
柱穴93	柱当り 掘形上層 掘形下層	10YR3/1 黒褐色～4/1 褐灰色砂泥、木片混 2.5Y6/1 黄灰色砂泥 2.5Y4/1 黄灰色砂泥	柱穴100	柱当り 掘形	10YR4/1 褐灰色粘質土 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロック少量混
柱穴94	柱当り 掘形上層 掘形下層	10YR3/1 黒褐色粘質土 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥	柱穴101	柱当り 掘形	10YR4/1 褐灰色粘質土 10YR4/1 褐灰色粘質土、2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロック混
柱穴95	柱当り上層 柱当り下層 掘形上層 掘形下層	10YR3/1 黒褐色砂泥 5Y4/2 灰オリブ色砂泥 2.5Y4/1 暗灰黄色砂泥 2.5Y4/3 オリブ褐色砂泥	柱穴102	柱当り 掘形	10YR3/1 黒褐色砂泥、2.5Y5/3 黄褐色砂泥少量混 10YR4/1 褐灰色粘質土、2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロック混
柱穴96	柱当り 掘形	10YR3/1 黒褐色砂泥 2.5Y4/1 黄灰色粘質土	柱穴103	柱当り 掘形	2.5Y4/1 黄灰色砂泥 5Y4/1 灰色砂泥、10YR4/4 褐色砂泥ブロック混
柱穴97	柱当り 掘形	10YR4/1 褐灰色砂泥 2.5Y4/1 黄灰色粘質土	柱穴104	柱当り 掘形	10YR4/1 褐灰色砂泥、10YR4/4 褐色砂泥少量混（掘形より粘質） 10YR4/1 褐灰色砂泥、10YR4/4 褐色砂泥ブロック混
柱穴98	柱当り 掘形	10YR4/1 褐灰色粘質土 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、10YR4/4 褐色、2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロック混	柱穴105	柱当り 掘形	10YR4/1 褐灰色粘質土 5Y4/1 灰色粘質土、5Y4/1 灰色粗砂泥

図8 建物2実測図（1：100）

掘形は径 0.2 ～ 0.3 m である。重複関係から建物 2 より新しいが、建物 4 との関係は不明である。

溝 5（図 14）西櫛笥小路の東側溝である。新旧 2 時期あり、新期のものは幅 1.0 ～ 1.3 m 以上、深さ 0.05 m、長さ 15 m にわたって検出した。旧期のものはやや東寄りに位置し、上下 2 層の堆積が認められる。最大幅 3.0 m、深さ 0.1 m、長さ 5.5 m 分を検出した。新旧両溝とも 10 世紀前半のうちには埋没しているようである。

流路 1（図 14、図版 2 - 1）西側溝は拡大しており、路面相当部分を含め河川化していた。河川は調査区南端で幅 4.7 m 前後、深さ 0.5 m である。埋土は大きく上層の黒褐色泥土層と下層の砂層および砂礫層とに分層できる。下層の砂礫層には遺物の大振りのものが多く、水流が強かつ

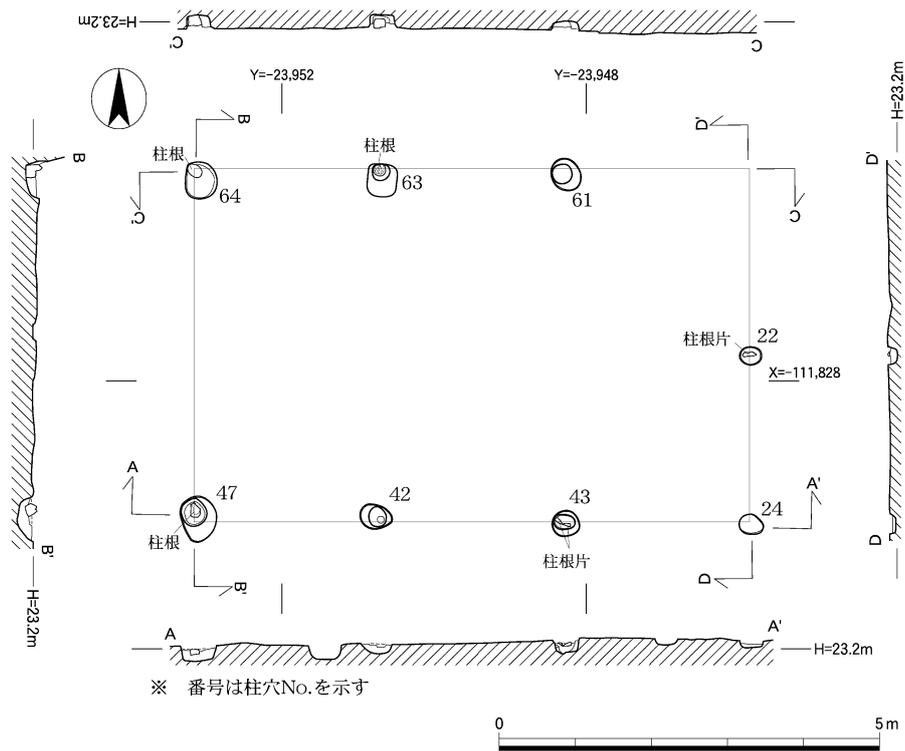


柱穴77	掘形上層 5Y4/1灰色粘質土 掘形下層 10YR3/1黒褐色砂泥 掘形南最下層 5Y3/1オリーブ黒色砂泥	柱穴84	柱当り 5Y3/1オリーブ黒色粘質土、柱根片か混 掘形 2.5Y4/1黄灰色砂泥
柱穴78	柱当り 10YR褐色灰色粘質土 掘形上層 2.5Y4/1黄灰色粘質土 掘形中層 10YR3/3暗褐色砂泥、やや粘質 掘形下層 5Y4/1灰色砂泥、粘質	柱穴85	柱当り 10YR4/1褐色砂泥、やや粘質 掘形上層 10YR4/1褐色砂泥、2.5Y5/2暗灰黄色砂泥少量混 掘形下層 2.5Y4/1黄灰色粘質土
柱穴79	柱当り 2.5Y3/1黒褐色粘質土、2.5Y5/2暗灰黄色粘質土ブロック少量混 掘形上層 2.5Y4/1黄灰色粘質土 掘形中層 10YR3/1黒褐色砂泥 掘形下層 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土	柱穴86	掘形 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥～粘質土、10YR4/1褐色粘質土混
柱穴80	柱当り 10YR4/1褐色粘質土 掘形上層 2.5Y4/1黄灰色粘質土 掘形下層 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土	柱穴87	柱当り 2.5Y3/1黒褐色粘質土 掘形 10YR4/1褐色砂泥、2.5Y3/1黒褐色粘質土
柱穴81	柱当り 2.5Y4/1黄灰色粘質土 掘形 2.5Y4/1黄灰色粘質土、10YR4/4褐色砂泥ブロック混	柱穴88	柱当り 10YR3/1黒褐色粘質土 掘形 10YR4/1褐色粘質土
柱穴82	柱当り上層 10YR4/1褐色砂泥 柱当り下層 10YR4/2灰黄褐色砂泥 掘形 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土	柱穴89	柱当り 10YR4/1褐色粘質土 掘形 10YR5/2黄灰色砂泥、10YR3/1黒褐色砂泥
柱穴83	柱当り 10YR4/1褐色砂泥 掘形上層 2.5Y4/1黄灰色砂泥 掘形下層 2.5Y3/1黒褐色粘質土～砂泥	柱穴82	柱当り上層 10YR3/1黒褐色～4/1褐色砂泥 柱当り下層 2.5Y4/1黄灰色～4/2暗灰黄色泥砂（細砂主）、固く締まる 掘形上層 10YR4/1褐色砂泥、10YR4/4～4/6褐色粘質土ブロック混 掘形中層 10YR3/2黒褐色砂泥 掘形下層 10YR4/1褐色～3/1黒褐色砂泥

図9 建物3実測図（1：100）

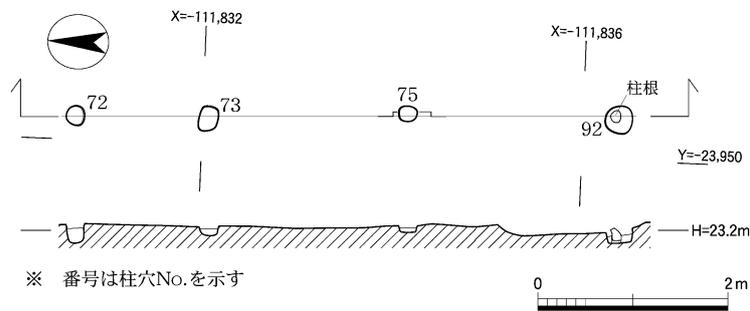
たとみられる。一方、上層の黒褐色泥土層の堆積時期は滞留状態に近いことが想定される。

水路施設 144（図 15、図版 2- 2）南拡張区において南北方向の水路を検出した。水路兩岸を板で護岸しており、板材は作り替えが認められる。新しい時期の板材は、内側の数箇所を杭で補強している。水路の規模は幅 0.3 m である。板材の長さは東側板 1.8 m、西側板 1.3 m 分を検出した。幅はいずれも 0.1 m 程である。古い時期のものは、西側板のみを検出した。新しい板材より 0.2 m



- | | | | |
|------|---|------|---|
| 柱穴22 | 2.5Y4/1 黄褐色砂泥、2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土混 | 柱穴47 | 柱当り 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
掘形 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 |
| 柱穴24 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 | 柱穴61 | 柱当り 10YR4/1 褐灰色粘質土、炭少量混
掘形 5Y4/1 灰色砂泥、2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 |
| 柱穴42 | 柱当り 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
掘形 5Y4/1 灰色粘質土、2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロック混 | 柱穴63 | 柱当り 10YR4/1 褐灰色粘質土
掘形 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土、2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土～砂泥 |
| 柱穴43 | 柱当り上層 2.5Y3/2 黒褐色砂泥～粘質土
柱当り中層 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
柱当り下層 10YR3/1 黒褐色粘質土
掘形 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥ブロック混 | 柱穴64 | 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 |

図 10 建物 4 実測図 (1 : 100)



- | | | | |
|------|----------------|------|---|
| 柱穴72 | 10Y4/2 灰黄褐色砂泥 | 柱穴75 | 10YR4/1 褐灰色粘質土 |
| 柱穴73 | 10YR4/1 褐灰色粘質土 | 柱穴92 | 柱当り 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
掘形 10YR4/1 褐灰色粘質土 |

図 11 柵 6 実測図 (1 : 80)

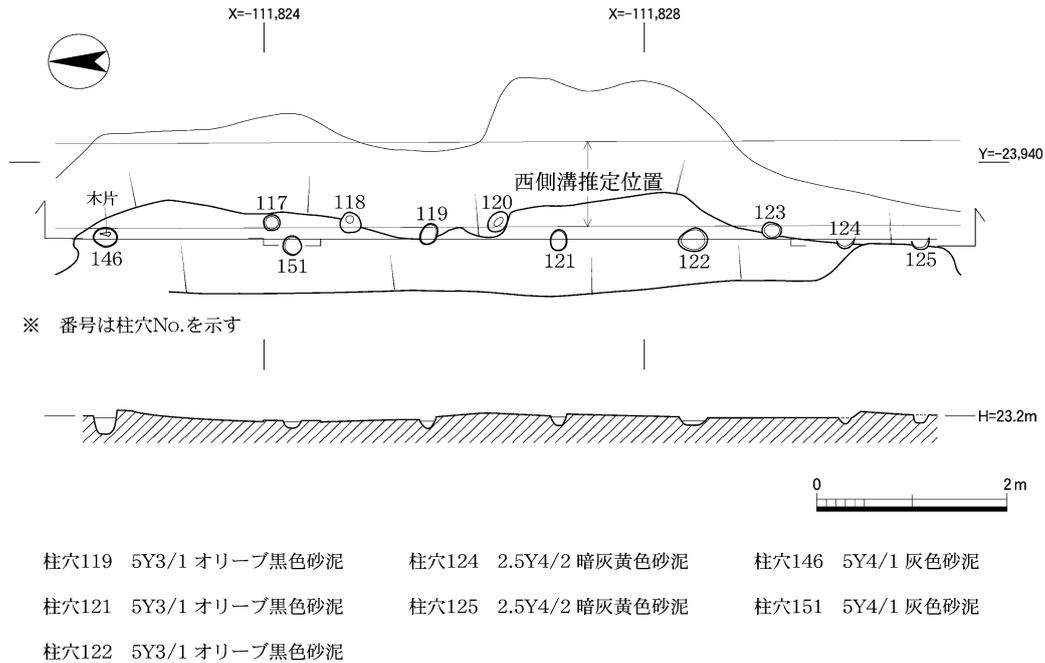


図 12 杭列7実測図 (1 : 80)

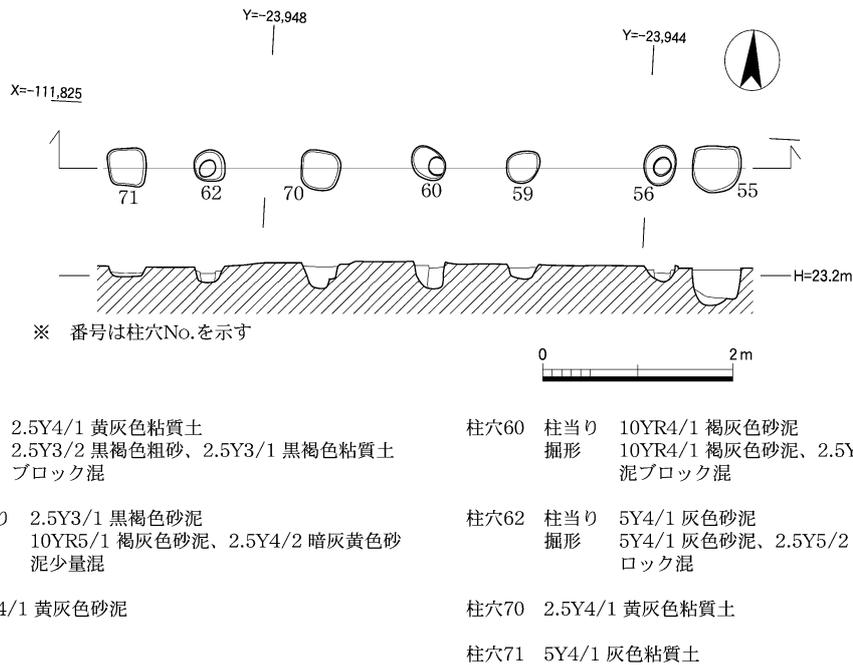
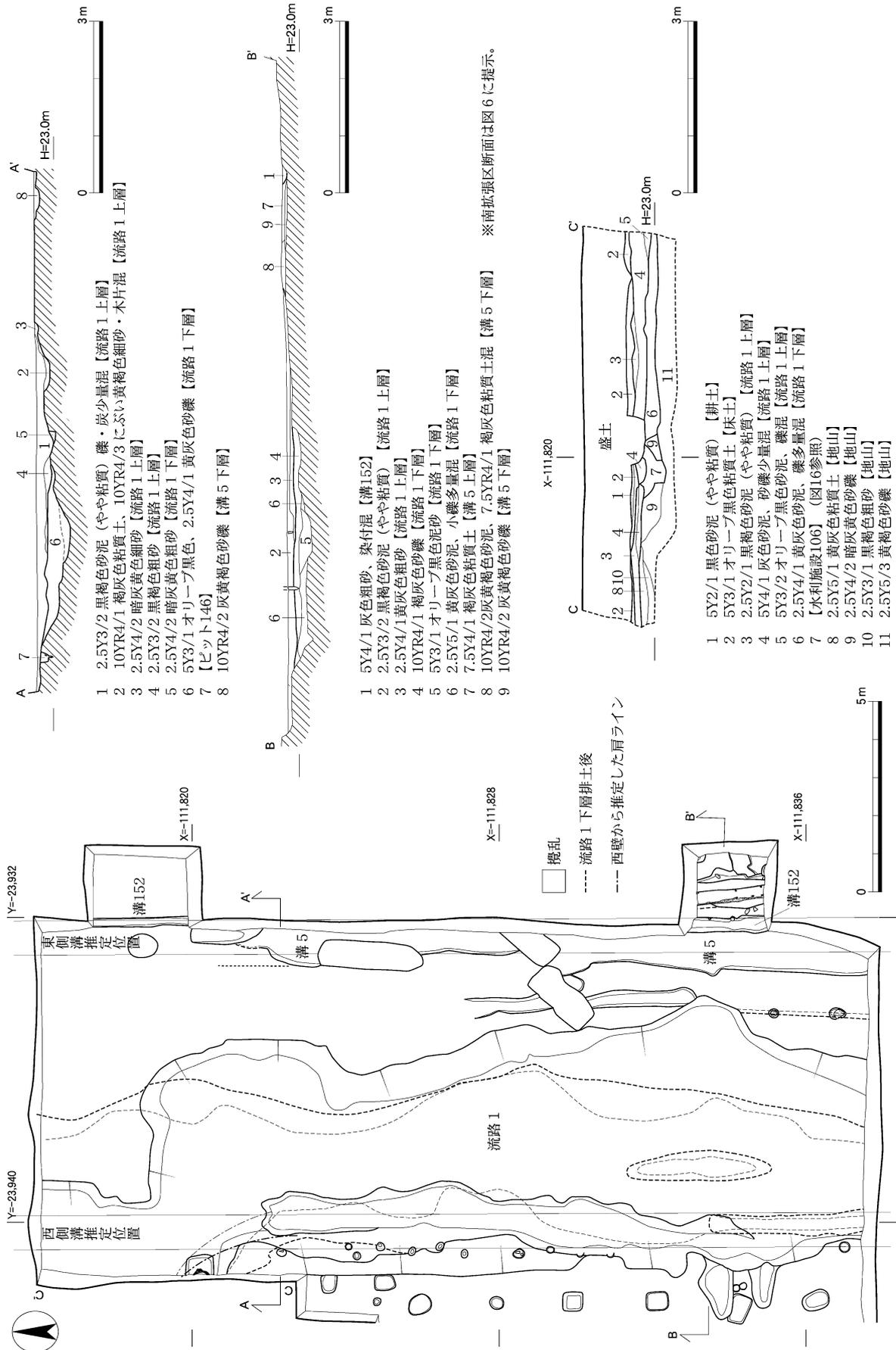


図 13 柵8実測図 (1 : 80)

西側に寄った地点で長さ 1.2 m分を検出した。水路の埋土は砂礫である。水路は北に対して西に新しいもので8° 振れ、古いのもので5° 振れている。ある時期の東側溝からの取水路であったと考えられる。河川化した流路と同様の砂礫層と同時期の遺物が含まれており、東側溝の埋没と同じ頃に埋まったと考えられる。

水利施設 106 (図 16、図版 2 - 3) 調査地北半の西壁、西櫛筒小路の河川化した流路の西肩部 (地



- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (やや粘質) 礫・炭少量混【流路1上層】
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質土、10YR4/3 にぶい黄褐色細砂・木片混【流路1上層】
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂【流路1上層】
- 4 2.5Y3/2 黒褐色粗砂【流路1上層】
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂【流路1下層】
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色、2.5Y4/1 黄灰色砂礫【流路1下層】
- 7 【ピット146】
- 8 10YR4/2 灰黄褐色砂礫【溝5下層】

- 1 5Y4/1 灰色粗砂、染付混【溝152】
- 2 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (やや粘質)【流路1上層】
- 3 2.5Y4/1 黄灰色粗砂【流路1上層】
- 4 10YR4/1 褐灰色砂礫【流路1下層】
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色泥砂【流路1下層】
- 6 2.5Y5/1 黄灰色砂泥、小礫少量混【流路1下層】
- 7 7.5Y4/1 褐灰色粘質土【溝5上層】
- 8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、7.5YR4/1 褐灰色粘質土混【溝5下層】
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂礫【溝5下層】

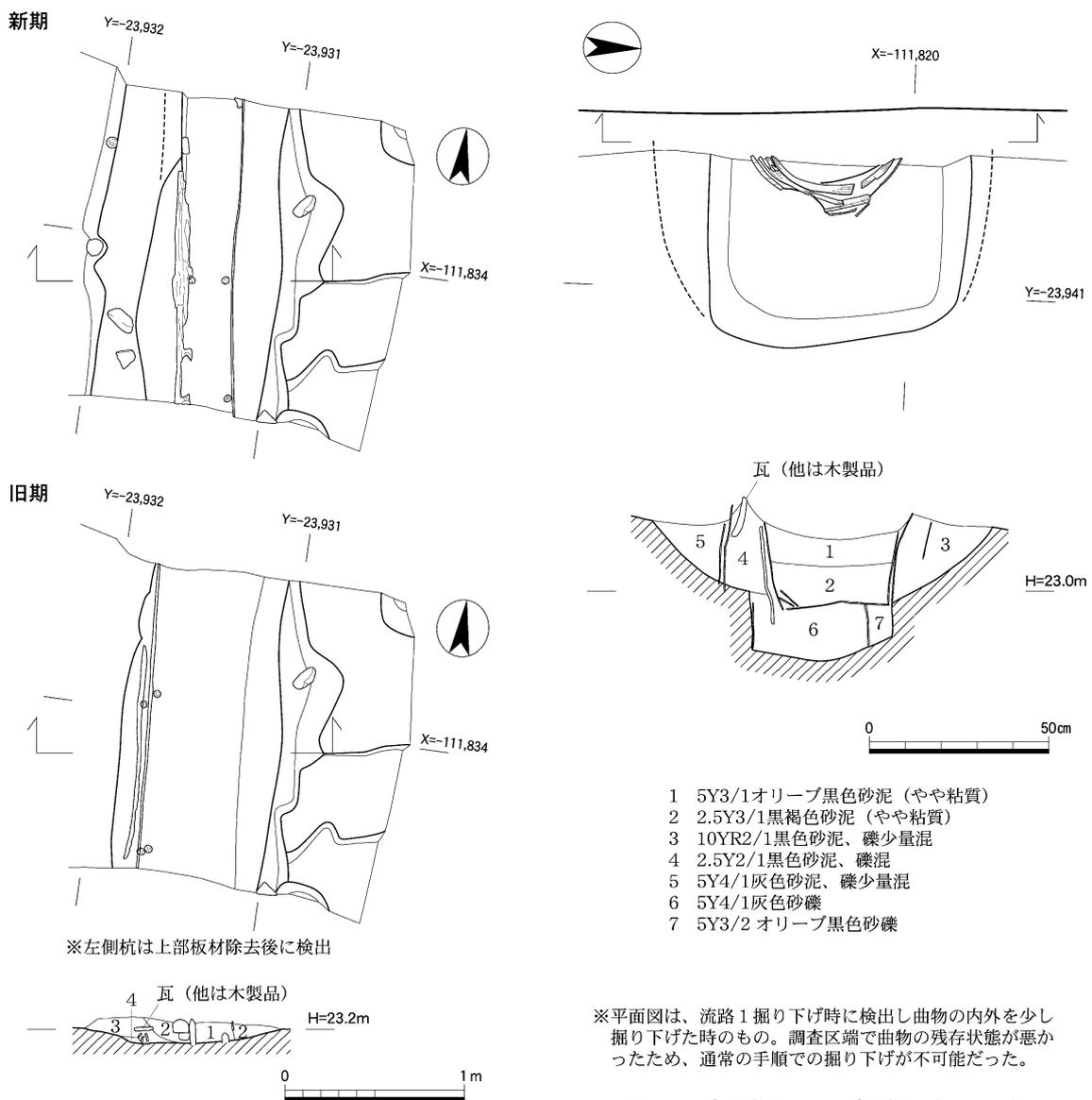
- 1 5Y2/1 黒色砂泥 (やや粘質)【耕土】
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土【床土】
- 3 2.5Y2/1 黒褐色砂泥 (やや粘質)【流路1上層】
- 4 5Y4/1 灰色砂泥、砂礫少量混【流路1上層】
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥、礫混【流路1上層】
- 6 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、礫少量混【流路1下層】
- 7 【水利施設106】(図16参照)
- 8 2.5Y5/1 黄灰色粘質土【地山】
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫【地山】
- 10 2.5Y3/1 黒褐色粗砂【地山】
- 11 2.5Y5/3 黄褐色砂礫【地山】

※南拡張区断面は図6に提示。

図14 流路1・溝5実測図 (1:100、1:150)

山相当部分)において、水利施設を検出した。据替えがあり、新旧2時期ある。古期のものは残存する深さは0.45 mである。掘形(径0.95 m)の埋土3層・5層を伴う円形縦板組と曲物(径0.3 m)を組み合わせた井戸状施設である。また、新期のものは残存する深さは0.35 mである。古期の井戸状施設と同様の埋土3層を掘形にもつと思われるが、埋土1層・2層を伴う円形縦板組(上側径0.4 m)の施設である。底板が認められる。

旧流路 150 平安時代の建物の下層に、旧流路が検出された。北東方向から南西方向に南流する。幅は調査区南端で3.0 m、深さ0.3 mである。さらに西側地山を切り込んで砂と砂礫層よりなる流路があるが、調査区の西に広がる。いずれも、遺物は検出してない。



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂【新期水路埋土】
- 2 10YR4/1 褐灰色砂泥、礫多量混【新期水路掘形】
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質土、10YR5/2 灰褐色粗砂少量混、礫多量混【溝5下層】
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粘質土【旧期水路掘形】

図 15 水路施設 144 実測図 (1:40)

図 16 水利施設 106 実測図 (1:20)

3. 遺物

(1) 出土遺物の概要

遺物はコンテナに土器・瓦類が23箱で、木製品は3箱である。ほとんどが河川化した流路の埋土に伴う陶磁器類である。出土した遺物の時期は、平安時代前期および前期末から中期にかけてのものが多数である。遺物は大きく3時期に分けられる。

遺物は小破片が多く、黒色土器や緑釉陶器陰花文片など図化できなかったものもある。

(2) 出土遺物

流路1出土遺物(図17・20、図版3・4)1～3は土師器である。1・2は皿で、1は口縁部が緩く屈曲し端部がわずかに上方に丸く収まる。2は口縁部がより屈曲する。3は杯で口縁部に2段ナデを施す。1・2より古い様相を示す。

4～9は須恵器である。4は蓋で中央部が平坦で、口縁部は屈曲し丸く収める。つまみは付かない。5は杯Aである。口縁部は直線的に伸び、端部は丸く収まる。6は瓶子の口縁部である。口縁端部を上につまみ上げ突出する。7は壺で底部を糸切りし、高台を貼り付ける。8・9は鉢である。8は底部糸切りで体部は直線的に斜め外方に開く。9は底部を糸切りしている。体部は外に開いている。底部に「富」とも判読できる墨書を伴う。

10～17は緑釉陶器である。10は皿で、底部を削り出して輪高台とする。高台内以外を施釉する。11は椀で底部を削り出し輪高台とする。ミガキ調整の後、高台以外を施釉する。12も椀で、高台は削り出しの輪高台とする。高台内は無釉である。13も同様である。14・15は耳皿である。小さな底部を糸切りしている。底部外面は無釉する。これらは京都産と考えられる。16は椀で、

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
奈良時代	軒瓦		軒平瓦1点		
平安時代前期	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、瓦、銭貨、石製品、木製品		土師器2点、須恵器10点、緑釉陶器10点、灰釉陶器3点、青磁3点、軒平瓦1点、銭貨2点、石帯1点、木製品2点		
平安時代中期	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器		土師器3点、緑釉陶器2点、灰釉陶器10点		
平安時代後期	土師器		土師器2点		
江戸時代	染付、施釉陶器				
合計		29箱	52点(4箱)	17箱	8箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

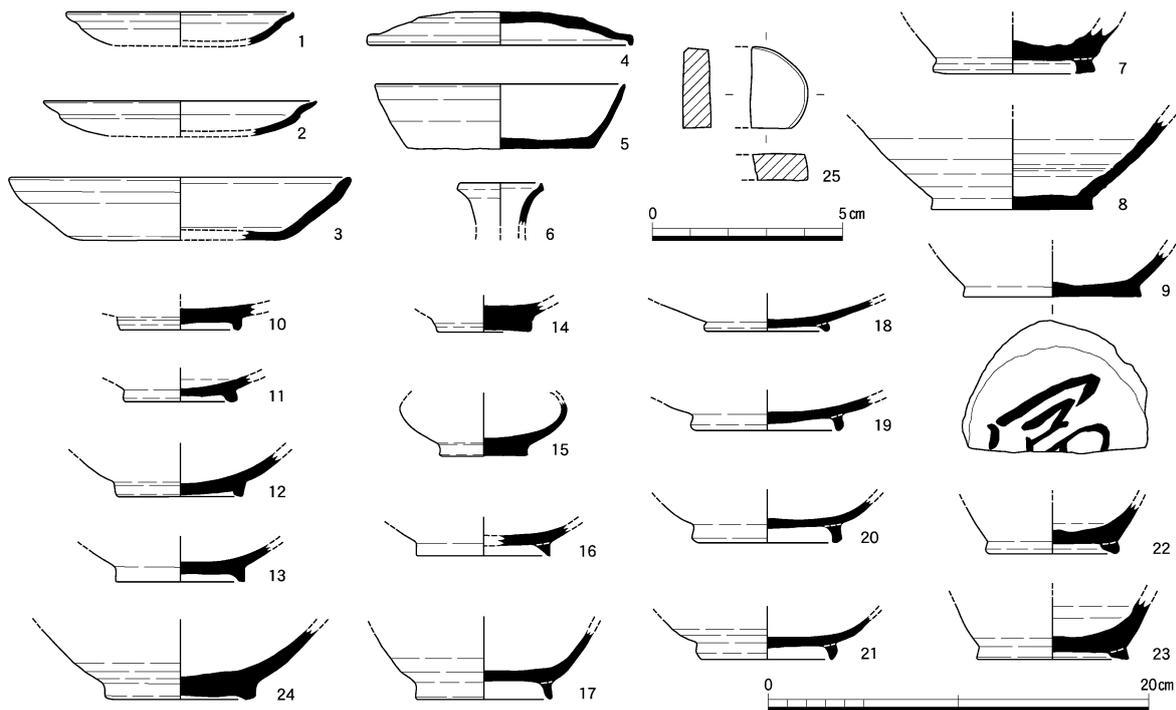


図 17 流路 1 出土遺物実測図（1：4、25のみ1：2）

底部は糸切りして断面三角形の高台を貼り付け、高台内面以外に濃緑色の釉薬を施す。軟質である。近江もしくは東濃産と考えられる。17は椀で、外開きの高い高台を貼り付け、底部内面を除いて施釉し、濃緑色を示す。東濃産の可能性はある。

18～23は灰釉陶器である。18の皿は小振りの外開きの高台を貼り付け、施釉は口縁・体部を漬け掛けし、重ね焼き痕を残す。19の皿は、内面の施釉も磨滅しているが、18と同様の成形であろう。20・21は椀で、断面三日月状の高台を貼り付け、漬け掛けしている。重ね焼きの痕跡を残す。20は内面底部に粗い釉薬を施す。22・23は壺の底部である。高台は貼り付けて成形している。底部外面まで釉だれしており、底部内面には自然釉が見られる。以上は、東海系である。

24は越州窯系青磁の椀である。低い削り出し輪高台である。

25は石帯の丸軋である。幅2.1cm、長さ1.6cm以上、厚み0.7cmである。石材は白色を帯びている。灰色の脈がみられる。潜り穴は見られず未製品とも考えられる。

時期は3が平安時代中期末（11世紀中頃）で、1・2・16～23が平安時代前期末から中期にかけてで、その他は平安時代前期のものである。

溝5出土遺物（図18・20、図版3・4）26・27は土師器である。26は皿で口縁部はわずかに屈曲している。27は杯で口縁部を外に屈曲させ端部を丸く収める。

28は須恵器の椀底部で、「上」の墨書がある。

29～31は緑釉陶器である。29・30は皿で、円盤状の平高台を削り出し、全面に施釉する。硬質である。京都洛西産と考えられる。31は椀で、高台を削り出して輪高台をつくり、高台内面を除いて施釉する。丹波篠産と考えられる。

32～36は灰釉陶器である。32は皿で、小降りの高台を貼り付け、内面のみ刷毛塗り施釉する。

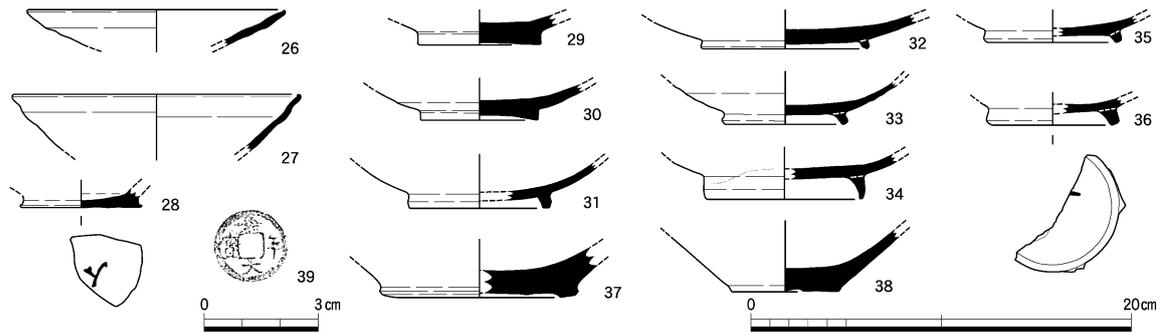


図 18 溝 5 出土遺物拓影・実測図（1：4、39のみ1：2）

メアト痕跡がある。古相を示す。33は皿で、外開きの高台を貼り付け、内外面に漬け掛けし、重ね焼き痕がある。34は椀で、高台は三日月状の高台を貼り付け、内外面に漬け掛けして、内面底部にも粗く施釉する。35は椀で、小振りなやや外開きの高台を貼り付け、内面にのみ施釉している。古相を示す。36は椀で、外開きの高台を貼り付け、漬け掛けで両面に施釉している。重ね焼き痕がある。以上は東海系である。

37・38は越州窯系青磁の椀である。37は削り出して浅い輪高台を作り、全面に施釉している。高台と内面にメアトがある。38は蛇の目高台をもつ椀である。37より古相を示す。

39は錢貨で、嘉祥元年（848）初鑄の「長年大寶」である。

年代は、33・34・36が平安時代前期末から中期にかけてのもので、その他は平安時代前期である。

土坑 143 出土遺物（図 19、図版 3・4）40は土師器皿で口縁部は内湾し端部は丸く収まる。

42は緑釉陶器椀で、高台は削り出し輪高台とし、全面に施釉する。京都洛北産の可能性はある。

43・44は灰釉陶器である。43は皿で、幅広く貼り付けた蛇の目状高台をもつ。44は椀で、外開きの小振りの貼り付け高台を付け、口縁部から体部に漬け掛けで両面施釉する。

遺物の年代については、40は平安時代後期、44は平安時代前期末から中期にかけて、42・43は平安時代前期の様相を示す。

水溜施設 106 出土遺物（図 19、図版 4）41は土師器杯で口縁部を外側に屈曲して端部を上方に丸める。年代は、平安時代前期末から中期にかけての様相を示す。

建物 3 出土遺物（図 19、図版 4）45～47は須恵器である。45は椀で、直線的に伸び、口縁は丸く収まる。46はつまみを持つ蓋である。口縁部は屈曲し、端部は下方に下がる。47は蓋で、

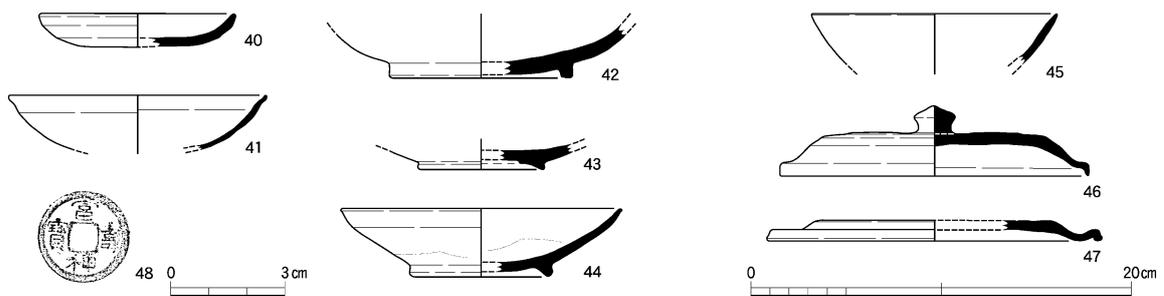


図 19 土坑 143・水溜施設 106・建物 3・柱穴 57 出土遺物拓影・実測図（1：4、48のみ1：2）

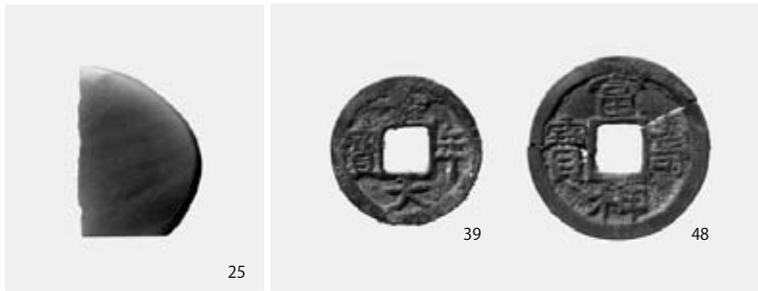


図20 石帯・銭貨

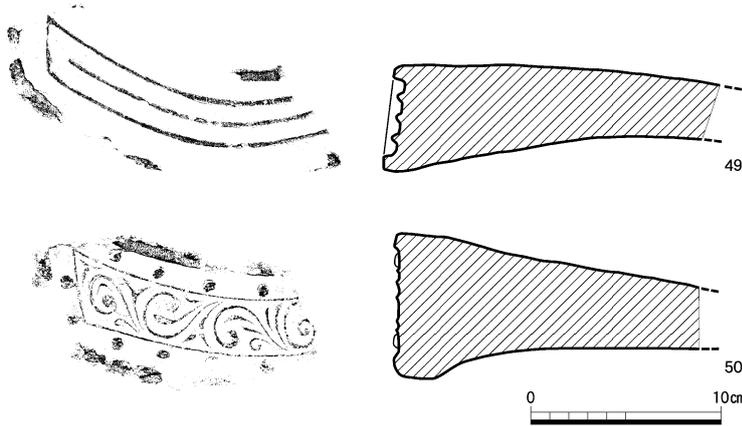


図21 軒平瓦拓影・実測図(1:4)

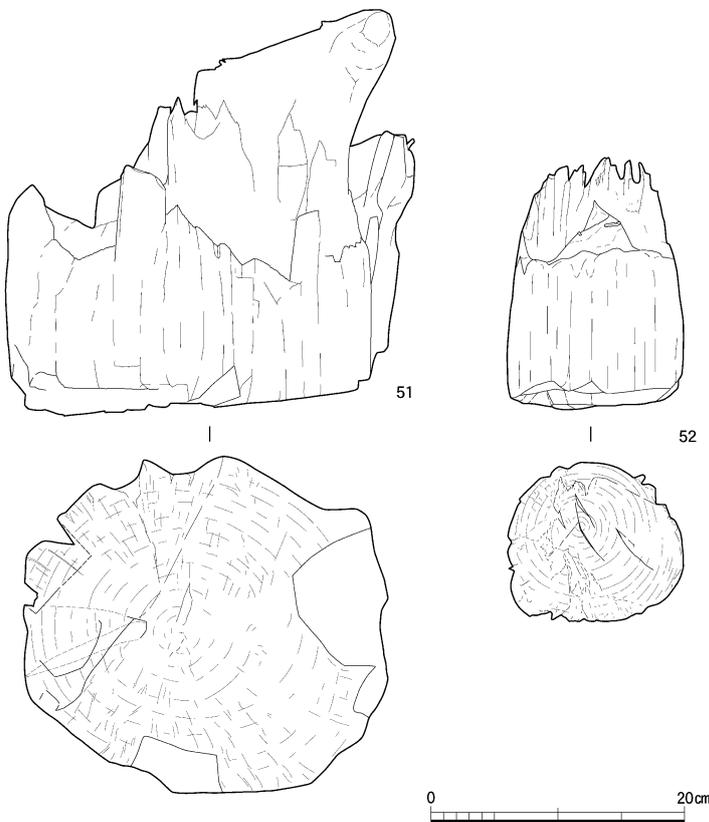


図22 柱根実測図(1:6)

平坦な天井部から口縁部が屈曲し下方に下がる。45・47は柱穴87、46は柱穴89から出土した。

年代は、いずれも平安時代前期の様相を示す。

柱穴57出土遺物(図19・20)48は銭貨で弘仁9年(818)初鑄の「富寿神寶」である。

軒平瓦(図21、図版4)49は土坑143から出土した。難波宮6574式に同文がある。重郭文を配する。郭内に弧線を施す。弧線断面は丸く、曲線顎。側面タテケズリ、顎部凸面横ケズリ、裏面タテケズリ後ナデをおこなう。裏面にベンガラが付着している。硬質で暗青灰色。オウセンドウ廃寺、深草寺跡、長岡京跡などに同文瓦がある。奈良時代。

50は流路1砂礫層からの出土である。中央に対向のC字状文を配し、唐草を3反転する。曲線顎で、瓦当凹部・顎部凸面はヨコケズリ、平瓦部側面・端部タテケズリ、凹面ナデ、凸面ケズリを施す。淡灰色、軟質である。西寺に同文瓦がある。平安時代前期。

柱根(図22・23)51は建物3の柱穴77出土のものである。残存径は28cmで、残存長は30cmである。材質はヒノキで、底部には伐採具によると考えられ

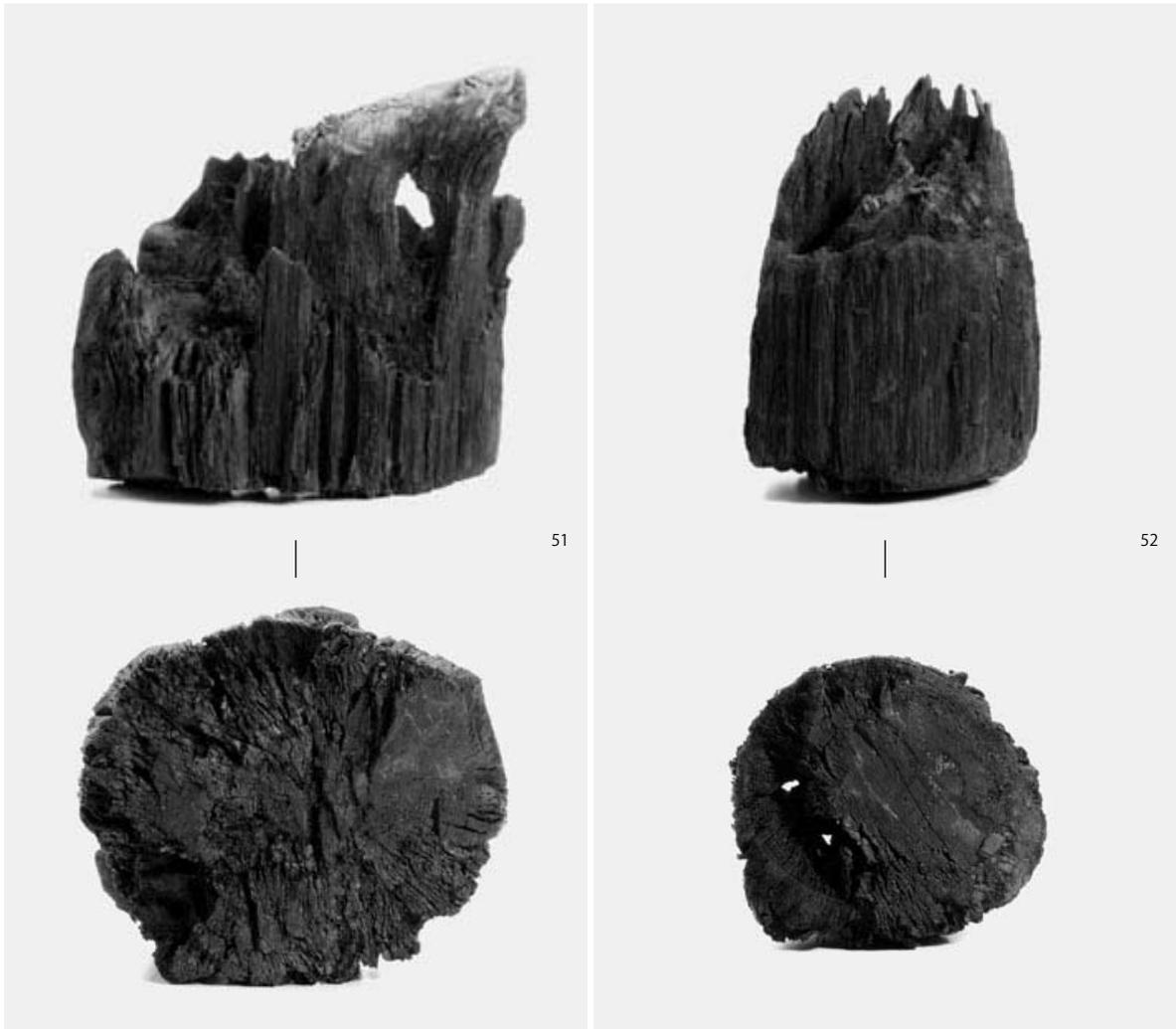


図 23 柱根

る切断痕が残る。

52 は建物 4 の柱穴 47 出土のものである。残存径は 14 cm で、残存長は 20 cm ある。材質はヒノキである。

4. まとめ

今回の調査では、主に平安時代前期から中期の遺構を確認することができた。これらは重複関係や配置、出土遺物の年代観から、概ね以下のような3時期の変遷をたどると考えられる。

I期（9世紀前半から中頃）平安京造営当初においては、西櫛笥小路には両側溝が整然と作られ機能していたと考えられる。調査区西側の十五町宅地内にはこの期の内に同規模の建物2・3が東西に軒を並べて建てられ、その間には目隠しと思われる柵6が配置されている。

II期（9世紀後半から10世紀前半）西櫛笥小路の西側溝が拡幅され河川化する（流路1）。東側溝（溝5）はそのまま維持され、出土遺物から10世紀前半まで機能していたものと考えられる。また、東側溝の東側には斜行する水路（水路施設144）が作られ、接続部は確認できていないものの東側溝から宅地内へ導水していたものと考えられる。一方、十五町宅地内は建物2・3が存続しており、建物と流路の間（西櫛笥小路西築地推定位置）に杭列7が新たに設けられる。

III期（10世紀前半から中頃）調査区西側の十五町宅地内では建物2・3が廃絶し、新たに小規模な建物4が建てられる。また、流路1は引き続き機能しており、その西岸には水溜め施設と考えられる水利施設106が作られている。

平安時代中期以降について、流路1は上層のシルト状の堆積層から平安時代後期（11世紀後半）の遺物が出土していることから、その頃には埋没したものと考えられる。一方、調査区全域には中・近世の耕作土とみられる土層が堆積していることから、この頃には耕地となっていたと考えられる。また、土層断面観察によると、流路1の位置には何時期かにわたる溝の痕跡が認められ、中近世を通じてここが水路として踏襲されたことが読みとれる。

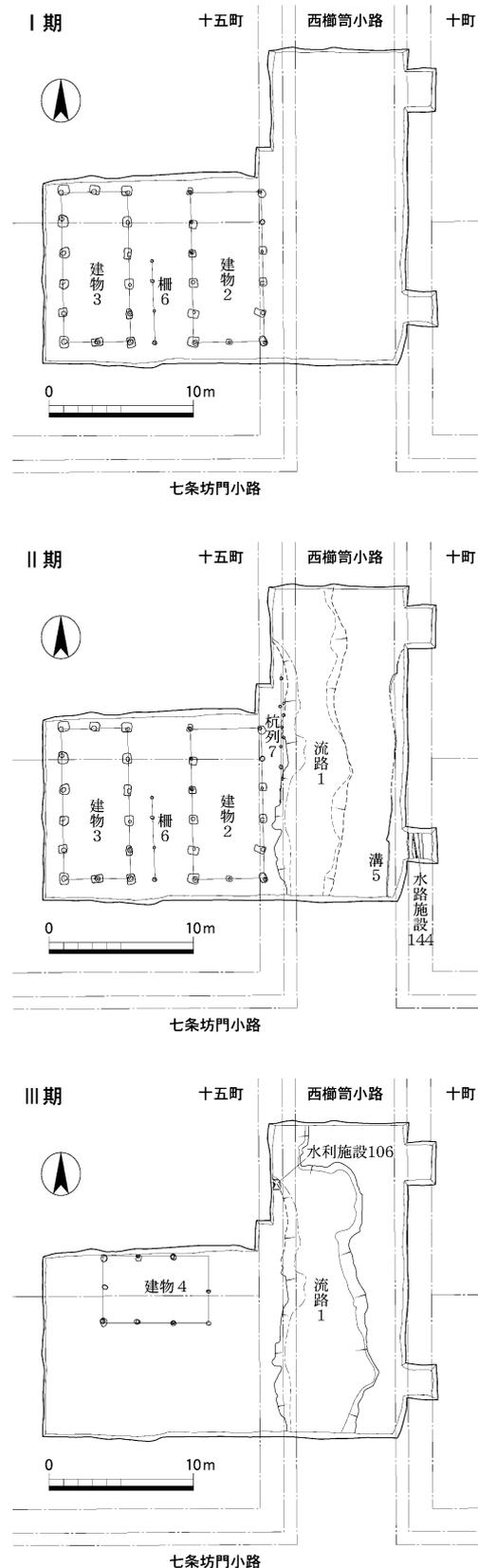


図24 遺構変遷図（1：500）

表4 掲載遺物一覧表

番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	調整	胎土	色調	焼成	遺構名	備考
1	土師器	皿	11.8	2.0	オサエ	密	10YR8/2	良	流路1	
2	土師器	皿	14.2	2.0	オサエ	密	2.5Y7/1	良	流路1	
3	土師器	杯	17.8	3.4	ナデ	密	10YR8/3	良	流路1	
4	須恵器	蓋	13.6	1.6	ロクロ	粗	N5/	硬	流路1	
5	須恵器	杯A	13.0	3.4	ロクロ	密	N7/	軟	流路1	
6	須恵器	壺	4.2	2.2~	ロクロ	密	N6/	硬	流路1	
7	須恵器	壺	底径8.4	2.2~	ロクロ	密	N6/	硬	流路1	
8	須恵器	鉢	底径8.4	4.8~	糸切り	密	5PB7/1	硬	流路1	
9	須恵器	鉢	底径9.2	2.4~	糸切り	密	5Y6/1	硬	流路1	
10	緑釉陶器	皿	底径6.5	1.4~	削り出し高台	密	5Y4/1	軟	流路1	京都産
11	緑釉陶器	椀	底径6.0	1.4~	削り出し高台	密	7.5Y6/2	軟	流路1	京都産
12	緑釉陶器	椀	底径6.6	2.2~	削り出し高台	密	10YR7/2	軟	流路1	京都産
13	緑釉陶器	椀	底径6.8	2.0~	削り出し高台	密	7.5Y6/2	硬	流路1	京都産
14	緑釉陶器	耳皿	底径4.8	1.6~	糸切り	密	N7/	硬	流路1	京都産
15	緑釉陶器	耳皿	底径4.6	2.8~	糸切り	密	7.56/2	硬	流路1	京都産
16	緑釉陶器	椀	底径7.0	1.6~	貼り付け高台	密	7.5Y5/3	軟	流路1	東海産
17	緑釉陶器	椀	底径7.2	3.6~	貼り付け高台	密	5GY	硬	流路1	東海産
18	灰釉陶器	皿	底径6.6	1.4~	貼り付け高台	密	5Y5/2	硬	流路1	
19	灰釉陶器	皿	底径7.4	1.8~	貼り付け高台	密	5Y5/3	硬	流路1	
20	灰釉陶器	椀	底径7.2	1.1~	貼り付け高台	密	5Y8/1	硬	流路1	
21	灰釉陶器	椀	底径7.4	2.2~	貼り付け高台	密	5Y8/2	硬	流路1	
22	灰釉陶器	壺	底径7.0	2.6~	貼り付け高台	密	7.5Y6/2	硬	流路1	
23	灰釉陶器	壺	底径8.0	3.4~	貼り付け高台	密	7.5Y7/2	硬	流路1	
24	青磁	椀	底径7.9	3.6~	削り出し高台	密	7.5Y6/2	硬	流路1	
25	石製品	石帯	縦2.2	横1.2			10Y7/1		流路1	
26	土師器	皿	13.2	1.9~	オサエ・ナデ	密	10YR8/3	良	溝5	
27	土師器	杯	15.2	3.0~	オサエ・ナデ	密	7.5YR8/3	良	溝5	
28	須恵器	椀	底径3.2	1.0~	糸切り	密	2.5Y7/1	硬	溝5	
29	緑釉陶器	皿	底径6.4	1.6~	削り出し高台	密	7.5GY3/1	硬	溝5	京都産
30	緑釉陶器	皿	底径6.2	1.9~	削り出し高台	密	5YR7/3	硬	溝5	京都産
31	緑釉陶器	椀	底径7.4	2.4~	削り出し高台	密	2.5Y7/1	硬	溝5	京都産
32	灰釉陶器	皿	底径8.8	1.8~	貼り付け高台	密	N8/0	硬	溝5	
33	灰釉陶器	皿	底径6.6	2.4~	貼り付け高台	密	N8/0	硬	溝5	
34	灰釉陶器	椀	底径8.4	2.4~	貼り付け高台	密	N8/0	硬	溝5	
35	灰釉陶器	椀	底径7.2	1.4~	貼り付け高台	密	N8/0	硬	溝5	
36	灰釉陶器	椀	底径7.0	1.5~	貼り付け高台	密	N8/0	硬	溝5	
37	青磁	椀	底径8.4	2.6~	削り出し高台	密	5Y6/3	硬	溝5	
38	青磁	椀	底径3.6	3.2~	削り出し高台	密	7.5Y5/2	硬	溝5	
39	銭貨	長年大寶	縦1.9	横1.9					溝5	
40	土師器	皿	10.2	1.8	ナデ	密	7.5YR7/3	良	土坑143	
41	土師器	杯	13.6	2.9~	オサエ・ナデ	密	2.5Y7/2	良	水利施設106	
42	緑釉陶器	椀	底径5.4	2.6~	削り出し高台	密	5Y5/2	硬	土坑143	京都産
43	灰釉陶器	皿	底径6.6	1.4~	貼り付け高台	密	7.5Y6/2	硬	土坑143	
44	灰釉陶器	椀	底径7.0	5.6	貼り付け高台	密	5Y6/2	硬	土坑143	
45	須恵器	椀	12.9	2.7~	ロクロ	密	N8/0	硬	建物3	
46	須恵器	蓋	16.2	3.7	ロクロ	密	7.5R5/1	硬	建物3	
47	須恵器	蓋	17.6	2.1	ロクロ	密	10BG6/1	硬	建物3	
48	銭貨	富寿神寶	縦2.3	横2.3					柱穴57	
49	軒平瓦	重郭文	高さ5.5	幅17.2	ケズリ・ナデ	密	5B6/1	硬	土坑143	
50	軒平瓦	唐草文	高さ8.0	幅15.0	ケズリ・ナデ	密	2.5Y8/1	軟	流路1	
51	木製品	柱根	28.0	30.0					建物3	
52	木製品	柱根	14.0	20.0					建物4	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうしちじょういちぼうじゅうごちょうあと							
書名	平安京右京七条一坊十五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-19							
編著者名	津々池惣一・小檜山一良							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 しちじょういちぼう 七条一坊 じゅうごちょうあと 十五町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 にししじょう 西七条 にしはつたんだちょう 西八反田町 129-1	26100		34度 59分 30秒	135度 44分 16秒	2009年1月 5日～2009 年2月19日	418㎡	マンション 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 七条一坊 十五町跡	都城跡	奈良時代以前	自然流路					
		奈良時代		軒平瓦				
		平安時代	西櫛笥小路東側溝、 建物、柵、杭列、 水路施設、水利施 設、流路	土師器、須恵器、黒色 土器、灰釉陶器、緑釉 陶器、軒平瓦、銭貨、 石帯、木製品				
		江戸時代	溝	染付、施釉陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-19
平安京右京七条一坊十五町跡

発行日 2009年3月31日
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>
印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961